

# アジアにおける留学の国際展開を考える

岡崎女子大学教授/東京大学名誉教授/龍谷大学客員教授 白石 さや

SHIRAIISHI Saya

キーワード： 高等教育ネットワーク、共同体創造、留学交流政策

はじめに

## I. 国家による学生交流政策：21世紀への設計図

- 1) 国民共同体想像を支えた学校教育ピラミッド
- 2) 地域共同体の創造と大学間交流ネットワーク構築：エラスムス計画の事例
- 3) メッカ巡礼型モデルと遍路札所型巡礼モデル

## II. 大学によるアイデンティティの再構築

- 1) 国民教育の伝統と個性化
- 2) 個性を結ぶ高等教育ネットワークの構築

## III. 人と文化と社会と

- 1) 地域社会の持つ教育力
- 2) 「外国人留学生」と「日本人学生」という区別は要らない

おわりに

はじめに

さあ、困った。

ウェブマガジン『留学交流』の「特集：アジアにおける国際展開」のための論考を執筆するよう依頼された。行き届いた丁寧な依頼である。困った理由は、まさにこの依頼テーマとして使用されている「国際」という用語が、昨今では揺らいでおり、そのことが「留学」という概念用語の使用に関して疑問を投げかける結果を招いているからである。「国際」という言葉は、現在では20世紀までのそれとは異なり、「グローバル」という相方を伴っている。この両語は往々にして互換可能であるかのように使用されているが、もちろん異なる概念である。この「国際」と「グローバル」の2つの概念の間で、「留学」がどう位置付けられるのか、それが今日の「留学」を議論する上での出発点であり、結論の方向を定める枠組みでもあると考えている。つまり依頼論考のテーマそのものが、本稿の検討課題を構成しているのである。仕方がない。依

頼された「留学交流」の「アジアにおける国際展開」を考察するにあたり、まず「国際」と「グローバル」とを定義し、区別を明確にすることから始めるしかない。あの電話口の知的な声は、きっと穏かな笑顔でこの議論を受け入れてくれるだろう。

さまざまな定義が提示されている中で、政治学のピーター・カッチェンスタイン (Peter J. Katzenstein) は、今日の世界はアメリカの帝国的支配圏 (imperium) のもとで、いくつかの地域 (regions) へと収斂しており、そこでは「国際化 (inter-nationalization)」と「グローバル化 (globalization)」とが共に進行しているとす。基本的には彼の叙述に基づきつつ、本稿においては次のように定義したい。すなわち、「国際化」は、空間領域に根差した国民国家 (nation-state) を主要なアクターとし、この国民国家相互間の地理的国境を越えた国際関係において、相互間の交流の拡大深化が「国際化」の進展であり、その構造は 20 世紀以来変化していない。一方で「グローバル化」は、空間を超え、時間を圧縮するプロセスであり、国民国家に替わる新しいアクターとして、企業や、銀行や、NGI や、ファンクラブや、個々人の活躍する場となっており、今や世界政治の形に変革をもたらしている。

さて、留学交流というヒトの移動は、この国際化とグローバル化のどちらに属していると考えられるだろうか？ 20 世紀世界では、それは当然国民国家間において、「外国において学ぶための移動」であった。しかし 21 世紀の今日において、それは新しい意味や位置付けを獲得していないだろうか？

以上の大枠を踏まえた上で、本稿では「アジアにおける留学交流の国際展開（当面はこれらの用語を使用する）」を、以下の 3 つの視点から議論してみよう。

その第一は、国家による学生交流政策として留学交流を検討するという視点であり、従来通りに「国際」的な関係の中で留学を把握する視点である。ここでの主体は国家である。人々の国境の越え方を司るのは、近代国家の主要な管轄領域であり、中でも有為な若者達が教育研究のために国境を越えて移動する行為をどう位置付けるのかは、国民国家の未来像の定義にも関わってくる。なお、当然のことながら、留学交流を論じるにあたっては、国外からの留学生受け入れを考察すると同時に、国外への留学生の送り出しをも視野に入れた相互交流として考察することを確認しておきたい。というのも、ごく近年に至るまで、日本における国家の「留学政策」はいかにして外国人訪日学生を「お招き」するのかという議論に傾く現象が見られたからである。平成 20 年の「留学生 30 万人計画」は 30 万人の「留学生受け入れ」であって、送り出しに関してはまるで考慮されていなかった。それが平成 24 年になると「若い世代の内向き志向」が発見されると同時に、「グローバル人材育成」の掛け声のもとで、送り出しに関するさまざまな施策が始まった。これは重要な一歩前進であるが、それとても課題がないわけではない。

第 2 は、高等教育諸機関としての大学自身が、留学生の受け入れと送り出しとによって、どのように 21 世紀に即した自己の再定義を行おうとしているのか、という視点である。ここでの主体は大学当局である。大学は 20 世紀以来の国民国家が構成する「国際関係」の中での自己規定を保持するのか、それとも多くの若者たちによって開始され進化しつつある「グローバル化」というプロセスの中に、新たなアイデンティティ

を模索しようとするのか、という問いである。

ここで結論を先取りすれば、もし大学が依然として国民国家とその国際関係の中に自己を位置付けるのであれば、大学に在籍して学ぶ学生達は、国籍によって外国籍の「留学生」と自国の「一般学生」とに区別されるだろう。学ぶために国境を越えて移動するのは「留学生」であり、そこでは「留学交流」が議論されることになる。しかし、もし国民国家という既存の差異化の枠を超えて、新たなグローバルに広がる地平の中に大学が自己を位置付け直すのであれば、現状どおりに国籍によって「留学生」と「一般学生」の両者を区別する必然はなくなり、その時に立ち現れるのは、国内外を問わない、「他大学との学生の交流（流動性の促進）」が企画実施されるのであって、キャンパスにおける「留学生」と「一般学生」の区別は意味を持たなくなる。その時に大学間の「学生交流」はあっても、そこでの越境の有無に関わる「留学交流」をことさらに言上げする必然はなくなる。

歴史を振り返ってみれば、高等教育機関としての大学は、近代国民国家よりも遥かに古い伝統と歴史を持っている。南アジアの地で玄奘三蔵（602-664年）を迎えたのはナーランダ大学であった。988年に設立されたアル・アズハル大学ではイスラーム法学のみでなくギリシア哲学も講じられたという。さらにポローニャ大学（1088年創設とされる）を引き合いに出すまでもない。高等教育機関としての大学が、近代的学校教育制度のピラミッドの頂点として、国家内で完結する、国民教育のための制度組織となったのは、世界の高等教育機関の歴史の中のほんの1-2世紀の間の出来事にすぎない。かつてのナーランダ大学や、アル・アズハル大学や、ポローニャ大学で、果たして現在のように「留学生」と「一般学生」とを制度的に区別する概念用語があっただろうか？

21世紀の今日では、20世紀世界において独占的正統性を持っていた国民国家の構成する国際社会に加えて、ICT(情報通信技術)の進展によって可能となった非国家(non-state)アクターによるグローバル社会が生まれている。こうした時代環境の変化の中で、大学がこれまでの近代的国民教育という枠を超えて、時代の要請に応じる斬新なアイデンティティの再構築を模索することは可能なことであり、歴史的な前例にも決して事欠かない。

こうした変革の過程において、大学にとっては「20世紀的近代」の枠そのものを対象化して、世界の高等教育研究センターとしての千年余に渡る伝統と誇りを積極的かつ創造的に継承する道が開けている。個々の国民国家を超えた地域共同体構築を目指す欧州連合(EU)は、すでにその教育政策のプログラムにおいて、「エラスムス」や「ソクラテス」や「ポローニャ」という近代以前の欧州における学術探求の歴史からその名称を選択しており、20世紀的近代国民国家の枠を超えるという意図を明確に表明している。

第3は、個人の主体性に注目して留学(ないしは学生)交流の在り方を考察する視点である。これはひとりひとりの学生やその家族に目を向けることであり、彼らの希望や不安のことであり、その人々が留学先で出会う人々のことであり、生活する社会のありようであり、文化のことであり、そして、この人的要素は留学交流を考える上

で実はもっとも重要な核である。いくら留学生の送り出しと受け入れのための国家の政策や、大学によるプログラムが整備されても、実際に住み慣れた故国を離れ、家族友人と別れて、言葉や文化の異なる異郷の地において学術知識や技芸技能の学習研究を行うのは、ひとりひとりの個人であり、彼らの選択と決断である。留学交流のエネルギーは、結局は個々人の野心と好奇心と希望から発している。彼ら自身は現在の国際化の拡大深化とグローバル化の進化する時代環境をどう感じ取り、何を学ぼうと志し、どこに向かおうとしているのか。留学交流を論じる上で、彼らの声を聞き、彼らの目線で考えることは、最も重要な手続きであろう。この時に、忘れてはならないことは、こうして移動して学ぶ人々を、送り出し、あるいは受け入れる社会と、その成員のことである。また、移動して学ぶ人々には、彼らに同行する家族や、留守を守る家族もいる。移動先で出会い、結婚する人も、そのままそこで職に就く人もいる。留学交流が、文化も言語も異なる社会への移動と、そこでの学習と、個々人の成長とをもたらすものであるのならば、留学交流は、当人を変えるだけでなく、彼らを取り囲む大学のキャンパスを変え、社会を変え、家族を変え、企業を変える。

以上の3つの視点は、決して各々が自律的領域を別個に保持しているわけではない。相互に乗り入れをし、あるいは入れ子状態になったりもしている。それを承知の上で以下に各視点からの議論を展開してみよう。

## 1. 国家による留学交流政策：21世紀への設計図

本節では国家による留学交流政策について考察を試みる。近年の動きとして国家が積極的に留学交流政策を策定し推進するようになったことは、国家と教育との間の関係における戦略再編がなされたと理解できる。20世紀的国民国家とその教育制度との間には、強力な相互依存的関係が内在していた。ここではまず近代国家と近代的学校教育制度との関係を振り返ることから始めよう。

### 1) 国民共同体想像を支えた学校教育ピラミッド

ベネディクト・アンダーソンは、国民国家を「想像の共同体」のひとつのあり方として定義するにあたり、近代的学校教育制度の成立とその普及が果たした役割の重要性を指摘している。彼は、ナショナリズムという国民想像の世界史的起源が南アメリカに始まったとして、その誕生の過程を（1）偶然的・恣意的に形成された植民地行政単位が、（2）地理的、政治的、経済的要因の影響下に次第に確固たる生活実体となり、そこに（3）人々による「意味の創造」がなされることで、徐々に「我々という国民」想像が獲得されたと説明する。

この時に「意味の創造」をもたらしたのは、人々による時間・身分・空間的な「旅」の経験である。中でも巡礼の旅が宗教共同体想像に現実性を付与してきたことに着目したアンダーソンは、近代的学校教育制度の下での教育巡礼の旅が、国民共同体を地理的空間的に体験し、その途次で出会う人々との共同体想像に現実的裏付けをもたらしたと指摘する。この教育の巡礼路という国民共同体想像装置に関して、アンダーソ

ンはインドネシア（かつてのオランダ領東インド）における植民地ナショナリズムの起源を以下のように論述している。

画一化された教科書、標準化された卒業証書と教員免状、年齢集団によって厳格に規制された学年制、学級の編成、教材、こうしたことは、おのずと独立の統合的な経験の宇宙を創出した。しかし、それにおとらず重要だったことは、このヒエラルキーの地理であった。標準化された小学校は植民地全域の村々と小さな町に分散し、中学校、高校は大きな町と州都に、そしてさらに高等教育機関（教育ピラミッドの頂点）は植民地の首都バタヴィアと、その南西100マイルの涼しいプリアンガンの高地にオランダ人が築いた都市バンドウンとに設立された。<sup>1</sup>

こうした村々の小学校に始まるオランダ領東インドにおける教育ピラミッドは、1921年にその頂点として、東インド最初の大学であるバンドウン工科大学が設立されることで完成した。白人学生を対象としていた同大学に、1期生として特別に入学を許可された「原住民」子弟はわずか11名であった。そのひとりが、1945年のインドネシア共和国独立にあたり初代大統領になったスカルノであった。それまでオランダ本国の大学を頂点として成立していた植民地教育ピラミッドが、東インド植民地内部において完結をみたその時に、やがて本国からの独立を果たすインドネシア国民誕生の準備が整ったと言えよう。教育ピラミッドの中心に向かう若い巡礼者の旅は、20余年後に現実のインドネシア共和国独立として実体化することになる。

日本においても明治期以降、教育機関のピラミッドの頂点としての高等教育機関は首都東京に集中的に設置されてきた。「われわれ日本国民」という想像と、その領土的認識は、日本地図が張られた各地の小学校や中学校の教室に始まり、高校・大学にいたる教育巡礼の旅路において体験されて、その意味は首都という中央に由来し、完結した。

こうした強固に相互依存的な国民国家とその教育ピラミッドとの関係において、国境を越えた学生の移動は、国民教育の完結性に介入し、葛藤を生み出す。外国籍の学生を受け入れて自国の国民培養装置に参加させること、その一方では未だ国民としては培養途上である学生を外国の教育ピラミッドへ送り出して参加させること、その両者は国民想像を安定的に世代を超えて再生産することへのリスクをもたらす。外国籍の「留学生」と自国の「一般学生」とを制度用語によって明確に区分することは、そのリスク軽減のための必然的な措置であつたらう明治維新前後に、若い国民国家であった日本は西欧文明吸収のために官費留学を制度化したが、それは高度に選別的であり、決して大量の若い「思春期の感じやすい」学生を一斉に送り出すことはなかった。昨今の留学交流推進政策においては、その基本に根本的な変更を加えることが決断されたのだろうか。それとも「内向きの若者」という認識が、リスクへの安全弁として作用しているのだろうか。

<sup>1</sup>アンダーソン、197-198 ページ

## 2) 地域共同体の創造と大学間交流ネットワーク構築: エラスムス計画の事例

日本とアジア諸国の大学間の留学交流を検討するにあたって、画期的な地域内大学間ネットワーク構築として評価される欧州連合のエラスムス計画 (Erasmus Programme) について概観してみよう。

エラスムス計画は1987年に正式決定されて以来、「ヨーロッパにおける大学間ネットワークを構築」し「欧州連合域内での大学生の流動性促進 (Mobility of University Students)」を行い、1996年からは生涯教育プログラムであるソクラテス計画 (Socrates Programmes) の高等教育部門として位置付けられ、引き続き生涯学習計画 (Lifelong Learning Programme) の一部として維持継続されてきた。2014年-2020年度のエラスムス計画は、7年間で147億ユーロの予算が付けられ、200万人の大学生や80万人の教員の交流、およびその他の多彩な長期短期に渡る人的交流を企画している。名称の由来となったエラスムス(1465-1536年)は「諸国との接触によって初めて得られるそういう知識と経験と見識とを求めて、欧州の各地に滞在し仕事をした」人物として紹介されている。<sup>2</sup>この「学生の流動性促進(「留学」という用語ではない)」と大学間ネットワーク構築を推進するプログラムは、欧州各国に散在する大学同士の間で、大量の学生や教員を受け入れ、かつ送り出すことで、各国における従来は自律的であった国民教育ピラミッドを相互に開いて結ぼうとするものである。そこではもはや「留学生」と自国の「一般学生」という区別はない。

20世紀の国際秩序(それは同時に二度にわたる国民国家間の戦争をも招来した)を支えてきた国民共同体想像の基盤に、学校教育制度のピラミッドがあったことを考えると、この欧州連合の高等教育機関の間での大量の人的交流促進の諸施策は、すでに「国際関係」としての国家間の「留学交流」ではなく、「欧州地域共同体」創出の設計に関わるものであることがわかる。それぞれの国家首都という唯一の頂点を目指してきた教育巡礼の旅が、欧州一帯に広く散開する各地各国の複数の大学を選択可能な頂点群として提供することによって、それぞれのピラミッドは、折り紙を開くように相互間で開放されていく。欧州地域全域に広がる学生と教員(さらには生涯教育の社会人受講者)の「流動性促進」によって、一挙に個々の教育ピラミッドは開いて繋がった教育ネットワークに変換されていき、そこに欧州高等教育圏が誕生する。この地域内に開かれた教育の巡礼路を多数の学生、教員、社会人が実際に辿ることによって、欧州地域共同体への「意味の創造」がなされ、単なるブループリントだったものに現実性が付与される。

ここで画期的なのは、この地域共同体想像のための教育巡礼路が、従来の国民教育制度にみられたような一極集中の「メッカ巡礼型モデル」と言うべきプランではなく、複数の拠点を有し、それを連携した「遍路札所型巡礼モデル」としての周遊プランであることである。メッカ巡礼型モデルでは、巡礼者はひたすら中心へ、中心へと向かい、旅の意味はその唯一の中心である首都に由来する。ところが遍路札所型巡礼モデルでは、目的地は分散され、その上で結ばれており、どこを起点としどこを終点としてもかまわない。一気に全行程を周る必要はなく、数回に分けて行うこともできる。

<sup>2</sup>European Commission(<http://www.erasmusprogramme.com/>)

そういう空間と時間とに開かれた周遊プランであり、その構造そのものが解きほぐされるような開放性を内在させている。周遊プランの旅の意味は、メッカ型のように中央で定義される単一なものではなく、複数のセンターが緩やかに結ばれるネットワーク構造そのものに由来する、緩やかで、柔軟で、多彩な、国境を越えて、文化と言語の異なる人々が広く共有できるものとなる。少なくとも、そういう成果を企図して設計された流動性促進プランである。それはもはや個々の教育主体間での成員の越境による留学交流というよりは、流動性そのものが目的であり、方法であり、構造であるという、そういう教育装置である。

アンダーソンが提起したのは、人々がそのために「すすんで死のうとする」に値する国民共同体想像の仕組みであった。その強固で閉ざされた自己完結的な共同体想像は、20世紀において2度に渡る世界大戦をもたらし、老若男女を含めた国民一丸となつての総力戦を強要し、都市爆撃に見られたような戦闘員と非戦闘員との区別なしの大量殺戮とを現実のものとしてしまった。そうした全面戦争の悲惨さと無意味さとを経験した後の、この21世紀において、我々は果たして再びそのような運命共同体を再生産したいと考えているであろうか。否、というのが一般的な答えであろう。<sup>3</sup>もちろんだからと言って、国民国家秩序そのものが近い将来に解体されるとは考えられない。しかし、国民のアイデンティティを創出する教育巡礼および研究活動のセンターが、国家間の境界線を超えて地域全域に散開し、メッカ中央の高みに向かうヒエラルキーの構造ではなく、遍路札所を結ぶ水平に伸び広がる開かれたネットワークとして体験されるならば、ゆっくりと時間をかけて「緩やかな教育と文化の共同体」が想像/創造されていくことは可能かもしれない。だれもその共同体のために「すすんで死のうとする」ことなど求められることのない、必要もない、どこから出発しても、どこで立ち止まっても、どこに所属しても構わない、そういう緩やかに流れ、循環し続ける開かれた共同体。エラスムス計画はそういう未来への希望を描いた設計図である。

アジアにおける留学交流政策を未来に向けて策定していく時に、このエラスムス計画をひとつのモデルとするアジア高等教育圏を構想して、アジア地域内高等教育機関のネットワークを構築し、そのネットワーク内での絶え間ない人的循環構造を設計することは、決して不可能なことではないはずだ。

### 3) メッカ巡礼型モデルと遍路札所型巡礼モデル

欧州連合におけるエラスムス計画が理解されると、日本政府による例えば「太平洋・アジア地域における学生の交流」といった戦略において、エラスムス計画の持つような革新的な「脱国民国家」「脱20世紀」の設計意図が、果たしてどこまで議論され、共有されているのかが気になってくる。

先の「留学生30万人計画」は、2020年を目途に外国からの留学生30万人の受け入れを目指すものであり、その方策として、大学等の高等教育研究機関の「国際競争力」を高め、日本語の不自由な外国人留学生向けの英語での授業を提供し、優れた留学生を戦略的に囲い込もうとするものであった。すなわち、同計画において、プログラム

<sup>3</sup>白石、2007年、52-54ページ

の基本的デザインは、外国人学生が、国外から（主要にはアジア各国から）日本という中心へ向かって旅をする、一極集中のヒエラルキー構造を持つ教育の旅となっている、メッカ巡礼型モデルである。学生はあくまでも「留学生」であって水平的な流動性促進策とは異なる。日本に向けての一極集中プランである以上、政策企画者の主観的意図に関わらず、結果として20世紀的な国民教育ピラミッドの外延拡張にすぎないものになる。

戦前戦中の日本の留学政策は、「大東亜共栄圏的教育巡礼モデル」であり、台湾から、朝鮮半島から、東南アジアから日本へ留学生を呼び寄せた。留学生の旅する移動の意味は日本という中心によって定義されていた。「留学生30万人計画」策定と相前後して、戦前戦中の訪日留学体験を懐かしがる東南アジア各地の元留学生の回顧談が喧伝されていたことから見て、これは確信的な戦前戦中の留学生政策の踏襲であるのかもしれない。しかしこれはエラスムス計画にみるような、21世紀に向けての開かれた緩やかな地域共同体想像/創造のための流動性促進及び大学間ネットワーク構築とは根本設計が異なっている。エラスムス計画が欧州の地域統合を図るものであることを模して、アジアの地域共同体的統合を目指すとしても、日本を中心とするメッカ巡礼型モデルに固執する限りは、海外から見れば、日本を盟主としてアジアを編成しようとした大東亜共栄圏構想から全く変化していないものと映る。

さらに昨今、政府や大学が取り組んでいる「グローバル人材育成」においては、もちろん一概には言えないが、例えば「目指せ！世界にはばたくグローバル人材！」というキャッチフレーズに表れているように、主要には留学支援英語教育によって武装させた日本人学生を海外各地へ送り出し、世界に貢献するボランティア活動などを体験させることで国際性を涵養するという趣旨の議論が目につく。これも「日本と諸外国」との「相互理解」という言葉が躍り、常に一方の主体は日本や日本人であり、複数の水平に連携した拠点間ネットワークとしての「地域世界」はなかなか見えてこない。先の「留学生30万人計画」におけるメッカ巡礼型モデルを、受け入れモデルから送り出しモデルへと方向を逆さにしただけである。「日本から出ていく」といういわば「打ち上げ花火型巡礼モデル」とでも言うことができるだろう。少なくとも、遍路札所型巡礼モデルのような、単一の中心も上下のヒエラルキーも持たない、複数の大学間の周遊プランという水平方向に開かれた地域共同体想像に資する議論は見えてこない。

留学交流プログラムを推進しようとしている政府中枢部においては、拠点間をネットワークで結び、学生や教員がそのネットワーク上を循環するという設計意図はすでに存在するように思う。しかし、大学当事者や、個々の学生や、一般社会において、この大量の学生や教員の交流プログラムの先に、国民国家アイデンティティを超える未来の地域共同体想像の可能性が潜んでいることが理解されているかどうかは疑問である。「留学生30万人計画」や「グローバル人材育成事業」やその他の幾多の交流プログラムにおいて、メッカ巡礼型モデルと、遍路札所型巡礼モデルとの間の、根本的な違いが明確に理解されない限り、当初企画された時には循環型モデルであったはずのものが、実施現場においてはメッカ巡礼型モデルにいつの間にか変貌していたとい

う事態は、容易に起こりえるのではなからうか。この点に関しては今後いっそうの議論を深める努力が必要であろう。

## II. 大学によるアイデンティティの再構築

### 1) 国民教育の伝統と個性化

今日の日本の大学は実験室の趣をもつ。少子化という時計が時を刻む中で、受験生のマーケット・ニーズを見極め、新規開拓（シニア世代、社会人、専門学校や短期大学生、そして国外からの学生）を目指して魅力づくりを試行し、補助金を出す国家の政策を睨み、出口である経済界の人事の動向を測る等々、様々の自己再編努力と実験を同時進行させている。明治時代以来、日本の大学は国民教育ピラミッドの頂点として、ナショナル・エリートやローカル・エリート、それに各界の専門家を育成するという役割を持ち、それに見合う学部組織やカリキュラム構成を準備し、それなりの実績を上げてきた。こうした過去の積み重ねの成果と言うべき現存の教育研究組織と教職員とを抱えて、そこから未来への変革を推進しようとするのは、実は厳しくて辛い作業である。大学に身を置く教職員も学生も、そのことは身に染みてわかっている。

ここで日本の大学が共有する基本的特性を考えてみると、以下の3点を挙げることができる。第1には、日本の社会も日本の大学も、英語を共通言語とする英語圏に所属するものではないこと。これは植民地化されることなく、日本の大学が国民教育のセンターであり続けた歴史から生じた誇るべき伝統の帰結である。第2には、日本の社会や大学は世界の若者を惹き付ける固有の文化的魅力や産業技術領域を持っているが、しかし欧米諸国の高等教育研究機関が数世紀に渡って築き上げてきたような近代的学術研究の高度な総合センターという地位にあるのではないこと。これは「近代」という政治体制・社会の仕組み・文化の形（学術研究の方法論を含む）そのものが、欧米において発展しそこから世界に広がったという歴史的事実を背景としており、一朝一夕には如何ともしがたい。例えば日本社会から生じる問い、日本社会における答え、そういう学術成果はあくまでも日本研究というローカルなものとしての評価しか受けない。イタリア政治史研究の成果が世界の政治学理論になることはあっても、日本の政治史研究の成果が欧米の政治学において分析理論として採用されることは稀有である。その結果として、第3には、海外諸国から日本の大学へやってきた留学生が、いかに見事に日本語をマスターし優秀な成績を修めても、彼らが自国に戻った時に、日本留学という履歴によって自ずと自国の知的トップエリートになるわけではないことである。英語と西欧近代とが統合された基本ソフトを共有する国際社会では、彼ら訪日留学生はあくまでも日本というローカルなアプリケーション空間での優等生でしかない。

こうした事実は、日本の大学が外国人留学生を受け入れる上での課題であるだけではない。日本人学生自身が世界に出ていく時にも等しく直面する事態である。これまでの大学はナショナル・エリートを養成したけれど、「これからの大学は自らが国際化し、そのキャンパスにおいて、グローバルに活躍できるエリートを育成しなければな

らない」というのが、政府や社会が大学に向け発信するメッセージである。しかし、そこで大学が目指す「国際化」が、単に欧米の現在の大学モデルに追随し模倣しようとするものであるならば、これは少々の外れではなかろうか。日本の大学が持つ特性がことごとくマイナス要因となってしまう。

一体、日本各地の大学現場ではどのような試みが始まっているのか、それを概観することから話を進めよう。20世紀（つまり前世紀）西欧型大学モデルの模倣を強要されることによって、オリジナルで多彩な試みが埋もれてしまい、画一化した成果しか生じてこない事態を避けたいからである。

## 2) 個性を結ぶ高等教育ネットワークの構築

上記の3つの日本の大学の基本的特性を認め、むしろそれを活かす形で、これからの大学像の可能性を考えるとどうなるか。それは、近代的学術教育研究の総合的センターになろうとするのではなく、国内および国外、特にアジア一帯に広がる多数の多彩な個性を持つ高等教育研究機関のネットワークを構築し、その主要なハブのいくつかになることである。つまり、若者たちの知識や技術や真理探求の旅において、いわばメッカのように世界中から一か所に人が集まってくるような巡礼路の最終目的地になろうとするのではなく、いくつもの遍路札所を周る巡礼路の個性ある札所のひとつひとつになることである。それぞれが他所では得難い個性と教育研究領域とに特化し、それを重点的に開発し発展させることを目指す。

最近の教育研究諸分野においては一層の専門化が進行しており、同時に、幅広い視野と知識とが求められている。こうした時代に、野心と希望に満ちた若者たちが辿る学びの巡礼ルートは、いくつもの専門領域を結び、いくつもの大学や大学院の研究室を経て、世界の広い地域に散開する多様な教育研究機関を繋いだものとなっていく。旅人達は、この遍路札所の全てを一気に回りきろうとするのではなく、何回にも分けて、ゆっくりと時間をかけて、それぞれが選んだ土地や札所を廻っていけばよいだろう。日本の大学が持っていた国民教育の伝統も、欧米の大学がもつ近代性も、このネットワークの中の「個性」として位置付けられる。

「魅力的な大学」になろうとすることは、英語で欧米大学の総合的カリキュラムをすべて教えるということではない。また、単独で、これからのグローバル・エリートを養成しようとする 것도 ない。日本の大学の背後には、英語圏ではないままで、それでも国際社会の中でここまでの地位を獲得してきたという魅力的な実績がある。日本の文化や社会や経済や政治に関心を持ち、日本にしかないものを学びたいという若者は世界中にいるだろう。平野健一郎は「文化が多様であるからこそ、人々は国境を越えて移動する」<sup>4</sup>と指摘している。教育の遍路札所のような周遊ルートは、東京もロサンゼルスも北京も結んで延びていく。

周知のように、シンガポール大学や北京大学やその他のアジア諸地域の大学もグローバル化時代に見合った高等教育機関としての自己変革とアイデンティティの再構築に精力を注いでいる。そのどれもが、この遍路札所巡りという形での若者達のための

<sup>4</sup>平野、134 ページ

知的探求ネットワーク形成を行っていく上で、頼もしい仲間であり同志である。共に個性を磨く仲間である。決してそのひとつひとつをライバルと見做し、競争し、単独であらゆる学問領域における世界最高水準の総合的教育研究機関となることを目指すのではない。もしアジア各地の大学が一様に世界の総合的教育研究センターになるという目標を持ち、同じブループリントに従って競い合うならば、膨大なコストがかかるだけでなく、その結果は、ミニ・ハーバード大学やミニ・MITがあちこちにいくつもできて、それぞれがアメリカのアイビーリーグの大学を縮小再生産した魅力のないものになり、結局は近代的学問探求の先達としての伝統を誇る欧米の大学の後塵を拝することになるだけである。

欧米の中心的な大学や研究所は、確かに数世紀にわたって近代的教育研究活動の総合的センターとしての実績と地位とを確立し維持してきた。知的価値の独占的保有者として、何が学術上の重要な課題であるのかという問いを設定をするゲート・キーパーの役割を果たし、何が品格のある教養であり、何がそうでないのかを選別し、感動の所在や創造性の形を定義し、彼らの使用する言語やその語彙が知的ヘゲモニーを獲得してきた。人々の間に知識格差を生じさせる構造的基盤そのものを創出し、近代的啓蒙主義思想を支え、同時にそれによって支えられてきた。彼らはまた膨大な書籍を収集保管管理する巨大な図書館を備えており、その教育研究活動の基礎は文字であり書籍であり文字メディアであった。こうして築き上げられ積み重ねられてきた文字と書籍による学問体系は、これからもしばらくはその重要性を保持し続けるのは間違いないだろう。しかしそれと同時に、グローバル化の時代、すなわちIT革命の時代において、デジタル・メディアによる新しい学問研究及び知識情報共有の可能性が生じてきている。欧米の主要な大学の卒業生が現在まで持っていた比較優位は、これからは徐々に相対化されていくだろう。これからの大学は新しい価値の体系の可能性を創造的に探究することなしには、次世代の教育を担っていくという責務を果たせないのではなかろうか。それは欧米に比べて後発であったアジア諸国の大学にとっては新たなチャンスでもある。

当然、日本国内の大学相互の間でもそれぞれに異なる特徴を育てていくことが重要となる。すでに各地の大小の大学は、さまざまな実験的創意工夫を開始している。四国八十八か所の遍路路には88の札所がある。そのひとつひとつが異なっている。ひとつひとつの札所が地元の人々に守られて社会に根を下ろしている。地方大学の中には地元のグローバル企業（各地方に大中小の優秀なグローバル企業があることも日本産業の特徴であろう）と連携をして生産現場のニーズに基づく独特の教育専攻領域を創設し、共同研究を行い、カリキュラムを作り、研究者・教員・学生の各レベルで相互に人材交流を行う試みを始めている。これまでの日本の企業は、ものづくりに加えて様々なノウハウを創出し積み重ねてきた。企業内での独自の教育や技術の伝達も行ってきた。しかしまた、バブル崩壊後、多くの企業は独自に教育を行う余裕を喪失してきている。これまで企業が担ってきた教育活動を、大学が企業との連携によって担っていくこともこれからの大学の重要な役割となる。大学の個性確立を考えるとということとは、日本社会の持っている強みを多角的に再認識することではないだろうか。

こうした日本の中小企業や地方といったニッチにおいて育成されてきた技術を掘り起し、教育の巡礼路における札所とするこの遍路札所巡りという教育ネットワークの旅は、アジア・太平洋地域からさらにグローバルに広がる空間において形成され、各地にハブがあり、クラスターがあり、そのどこからも人々は出発し、そのどこでも短期や長期に足を止めることができる。これからの高等教育機関再編においては、こうして学生・教員の国境を越えた交流プログラムはその内部に統合的に含まれたものとなっていくのではないか。高等教育という頂点における変化は、自ずと中等教育や初等教育の目指すものにも影響を与える。

### III. 人と文化と社会と

飛行機がハワイの上空に到達した時、窓の下には輝くような青空を背景に一面の白雲が広がり、その雲間には数十もの小さな虹が一面にかかっている、まるで花畑のようであった。その美しさと珍しさとに、乗客もキャビン・クルーも窓際に吸い寄せられた。40年以上前のその時の光景が、生まれて初めて飛行機に乗り、交換留学生としてニューヨークに向かう途中だった私にとって、それ以後、「留学」という言葉に付随するイメージとなった。「留学」には輝くような希望と不安とがいっぱい詰まっている。

そして個人の視点で考えるとき、「言語も文化も異なる異郷の地で学ぶ」という体験の側面において、「学生の流動性」と言うよりは「留学」という従来の用語のほうが身に添ってくるのは事実である。

#### 1) 地域社会の持つ教育力

留学交流に関して考えるということは、受け入れ大学のカリキュラムや施設設備、授業料や生活費だけの問題ではない。送り出し大学における言語教育だけの問題でもない。もちろん、そのひとつひとつが重要な案件として検討されなければならない。留学交流は、グローバル化時代の国家戦略であり、日本やアジアや世界の大学による自律的な高等教育再編構想でもある。しかしさらにその上で、個々の学生にとっての留学という体験は、夢と希望を追求しようとする野心に満ちた将来設計であり、人や文化との出会いであり、積極的に幸福を求める生き方である。したがって大学や国家が留学交流を政策戦略として考えるということは、人と人との出会いを企画立案することであり、21世紀における社会や国家や教育研究の姿を設計することである。

これまでは留学生の地域社会での日常生活に関する事柄は、例えば「住居問題」というように効率よく解決されるべきサイドイシューでしかなく、親切的な留学生担当の教職員が、個人的に身をすり減らして対処する「雑務」であり、その結果、留学生を招くことに積極的であった人々が、こうした「雑務」によってバーンアウトしていくという話はよく聞く。しかし、この生活領域はもはや「雑務」ではなく、きちんとした位置付けをされ、人や社会や文化との出会い方としての配慮がなされるべきであろう。言葉も社会のシステムも文化もわからない外国人留学生が日常生活を築き上げるためには、多くのエネルギーと時間と知識を必要とする。留学の価値を左右する領域

ともなる。したがって留学交流を企画していく上においては、こうした日常生活の構築を積極的にデザインしていくこと、学生と地域の住民との日常的な出会いを用意していくことが求められる。このことは受け入れ社会そのものが自己を開き変化していく好機である。

大学で留学生の指導をしていると、国費留学生で留学生宿舎に住み、経済的心配をする必要のないという「恵まれた」学生よりは、民間の安いアパートに住み、様々なアルバイトをしながら勉学をする私費留学生の中に、生きた日本語の上達が早く、日本社会や日本人への理解も深い、そういう学生がいることを経験する。それは特に受け入れ大学が用意する留学生宿舎で、往々にして外国人留学生同士で親しくなり、いつまでたっても日本社会に溶け込むことがないという事例も起こる。日常的に外国人留学生と日本人学生、そして地域社会の人々とが生活空間を共にし、気軽に声をかけあう、そういう場の設計が要る。外国人だからと警戒することや無視することではもちろんなく、また、遠慮をし合ったり無理をしておもてなしをしようとするのではない。「開かれた社会」というのは、一生懸命に「お客様」としての外国人をおもてなししようとするのではなく、地域社会に住む住民同士の日常的な飾らない交流の場を持ち、その中に学生たちが含まれていくことではないか。学生たちは（外国人留学生も、そうして日本人の学生も）日々の生活を通して近隣の地域社会の人々と交流をし、そうすることで大学のキャンパスでは経験できない多様なニュアンスを帯びた文化的価値や考え方の実態を体験する。

グローバル人材育成が求められるようになったのは、国民国家の領域を飛び出して世界という広い空間において、新しいマーケットを想像し創出する経済活動がこれからの人々の日常生活の場となっていくことが予見できるからである。この「新しいマーケット」では、イマジナティブでクリエイティブなアイデアこそが価値を生み出す。

すでにアメリカの20歳代の若者達の胸のすくような創造的活動により、世界は大きく変化した。今日、人々が考え、発信し、情報を求め、相互にコミュニケーションを取り、映像を共有し、ネットワークを形成して趣味やボランティアの活動をし、ネット・コミュニティによるマス・コラボレーションによる創造やイノベーションを遂行し、インターネットで物品を購入し、瞬時にグローバルにお金を動かすやり方は、40年前には想像もできないものだった。もはや国家や巨大企業だけでなく、数人規模のNPOや、個人が、小さなコストで独自のアイデアを自由に発信し、時間と空間を超えて地球上の各地の人々と意見を交換し、共に活動し、生産し、価値や嗜好を創造共有することが可能となった。グローバルな活動領域がすでに誕生している。

若い人々が、大学で学びながら、あるいは職場で働きながら、その傍らでしっかりと日々の生活を送り、近隣社会の人々と交流をし、伝統的な年中行事やポピュラーカルチャーなどを通して文化的経験を積んでいく、そういう生活空間の持つ教育力に注目したい。特に外国人留学生の場合には、日常生活をする地域社会から学ぶことは、豊かで刺激的で新鮮であり、そこで学んだ多様な文化的経験や知識や洞察力というのは、以後の彼らのクリエイティブな想像力を育み、同時に、国境と文化を越えて広

がるマーケットのその需要や、流通網や、販路や、購買者の性向等々を理解する上で大いに役立つと考えられる。日本人学生には、日本の社会や文化は空気のように「あたりまえ」すぎて見えてこないかもしれない。それだからこそ、日本人学生にも海外の大学で短期長期に学ぶ機会が与えられるという学生交流計画が求められている。

## 2) 「外国人留学生」と「日本人学生」という区別は要らない

大学が個々の特色ある大学として自律的に広域ネットワークのノードやハブとなる時、もはや「外国人留学生」と「日本人学生」とを区別する根拠はなくなる。大学間ネットワークそのものが、国民共同体に替わって、より広域の地域共同体を胚胎する体験を彼らに提供する。

このネットワーク・システムが描く学生像は、これまでのように人生のうちのほんの数年間だけ高等教育を受けるのではなく、キャリア形成期間全体を通して、アジア各地や欧米の高等教育や研究機関で学び、研究に従事し、結婚をし、家族を養い、職について短期や長期に働く、時にはまた教育研究機関に戻ってくる、そういう人々となる。彼らはその過程で各地の社会の機能の仕方や多様な文化の知識を蓄え、人間性への理解を深め、さらに長い旅路の途中で出会った学生や研究者や仕事の同僚や地域社会の隣人たちとの間に友情や信頼のネットワークを築きそれを財産とする、そういうグローバル化時代を担っていく人々である。エラスムス計画が今や生涯教育計画の一部として繰り込まれ、企画実施されているのは、そうした人々—生涯に渡って学び、働き、国境を越えて移動する—の登場を予期し、サポートするものとして制度設計されているからと理解できる。

この時、こうした未来に向けての学生交流活動を支援する上で重要な役割を果たすのが、多様な文化的背景を持つ学生達を「普通に」迎え入れ、一緒になって居心地の良い「ご近所」を創り出す、地域社会の住民である。学生達を「我々の仲間」「ご近所の住民」として受け入れるという地域社会の人々と、相互に学び合い、刺激し合って新しい居心地の良い地域社会を創り出すこと。そうした外国人留学生にとって居心地の良い近隣社会は、きっと私たち自身にとっても豊かで住みやすい社会となるだろう。それは客人のためのおもてなし社会ではない。

## おわりに

杉村美紀によれば「今日のアジア諸国では、留学が「普通の」人々が自分たちの意志で留学先の教育機関やプログラムを選び取ることができる時代となった」<sup>5</sup>という。移動時間も飛躍的に短くなり、コストも下がり、多数の「普通の」若者が留学というヒトの移動に参加している。普通の人々が、普通に国境を越えて移動し、学び、出会い、創造する時代の到来である。それがやがて、今以上に普通の日常生活の姿となる。例えばこの『留学交流』で毎月議論され、考察され、提案されていくことが、やがてはアジア全域に渡ってそういう「普通の時代」を招くひとつの基礎を形作るとしたら、それは誠に喜ばしいことではないだろうか。そしてある日、ふと気が付いてみると、

<sup>5</sup>杉村、10-25 ページ

もはや日本はアジアと相対峙しているのではなく、その中にすっぽりと埋もれて、緩やかに流れ、循環し、出会う、そういう生涯に渡る教育の巡礼の旅によって創出された「緩やかな教育の共同体」の成員同士として日常生活を共有している、そういう時代になっているかもしれない。う～む、月遅れの初夢であろうか。

\* 本稿は、2008年の『アジア研究』第54巻第4号[特集:アジアにおける留学の新段階—アジア諸国の高等教育戦略と留学生政策]において発表をした「どこから?どこへ?遍路札所を結ぶアジア・太平洋の高等教育ネットワーク構築」をアップデートし再構成したものである。

参考文献:

白石さや「どこから?どこへ?遍路札所を結ぶアジア・太平洋の高等教育ネットワーク構築」、アジア政経学会編『アジア研究』第54巻第4号、2008年、44-55ページ

白石さや「東アジア大衆文化ネットワークと日韓文化交流」濱下武志・崔章集編『東アジアの中の日韓交流』慶應義塾大学出版会、2007年、52-54ページ

白石さや「私はここに属さない—グローバル化の時代の若者文化を考える」、『グローバル化した日本のマンガとアニメ』学術出版会、2013年、323-359ページ

ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体--ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年

白石隆『スカルノとスハルト』岩波書店、1997年

杉村美紀「アジアにおける留学生政策と留学生移動」、アジア政経学会編『アジア研究』第54巻第4号、2008年、10-25ページ

平野健一郎『国際文化交流の政治経済学』勁草書房、1999年

西川潤・平野健一郎編『東アジア共同体の構築3:国際移動と社会変容』岩波書店、2007年

Peter J. Katzenstein, *A World of Regions: Asia and Europe in the American Imperium*, (Cornell University Press, 2005)

Cris Shore, *Building Europe: The Cultural Politics of European Integration*, (Routledge, 2000)